

世紀末のフランス極右—ルペンの見果てぬ夢(1)—

畑 山 敏 夫

目 次

はじめに

第1章 1990年代の選挙における国民戦線

第1節 1990年代の選挙と国民戦線

第2節 国民戦線支持者の変容—「プロレタリア化」の昂進

第3節 1990年代の政党システムと国民戦線（以上本号）

第2章 国民戦線の戦略的变化

第1節 労働者の組織化へ

第2節 社会的右翼への変身

第3節 「国民優先」と反「国際化」

第4節 国民戦線の戦略転換

第3章 ポスト・ルペンをめぐる確執—メグレ派の台頭

第1節 国民戦線の内部対立と「新右翼」派の形成

第2節 党組織の整備とメグレ派の台頭

第3節 ルペン対メグレ

第4章 国民戦線における持続と変容

第1節 極右政党としての国民戦線

第2節 抗議政党から政権政党へ

第3節 ルペンの見果てぬ夢—フランス極右の新世紀

おわりに

はじめに

1972年に「国民戦線（FN）」が結成されて以来、既に、25年以上の年月が経過している。最初の10年間は、FNにとって内部対立に苦しんだ時代であ

り、選挙においても泡沫政党から脱却することはなかった⁽¹⁾。だが、1983—84年の一連の国政・地方選挙で突然の躍進を見せ、FNに対する関心は急速に高まっていく。1950年代のプジャード運動のように、やがては消えていく束の間の現象という多くの予想に反して、FNは政党システムに定着していく。1988年大統領選挙では、14.4%という極右としては驚異的な得票を記録し、FNは既成政党にとって無視しえない存在となっていった⁽²⁾。

そして、1990年代には、1995年大統領選挙で初めて15%を突破し、1997年国民議会選挙でも15%近い得票を記録している。特に、党首J—M・ルペン(Jean-Marie Le Pen)の個人的人気に大きく依存する大統領選挙とは違って、個々の候補の集票力と地方での組織力が問われる国民議会選挙で15%近い得票をあげたことは、FN組織の充実を物語っていた。

1995年国民議会選挙の後に行われた市町村議会選挙では、南フランスの3つの都市(トゥーロン、オランジュ、マリニャヌ)でFNの市長が誕生し、97年2月には、マルセーユ近郊の自治体ヴィトロールでもFNが市政を握った。既成政党を激しく批判してきたFNが、現実政治の場で統治能力を試されることとなった。1997年3月29—31日には、ストラズブールでFNの全国大会が開催され、FN大会への大規模な対抗デモが左翼や労組、市民団体などによって組織された。国民の中に極右勢力の台頭に対する警戒感が広がり、FN大会の禁止という強硬な措置まで取りざたされた⁽³⁾。

さて、1980年代には、選挙での突然の躍進—政党システムへの定着を経験したFNであったが、90年代には、注目すべき変化が見られる。FNの支持者において民衆的な性格が強まり、それとともに、FNの運動も社会的テーマを強調し、労働者への浸透に乗り出すなどポピュリスト的色彩を強めている。また、全国代表幹事B・メグレ(Bruno Mégret)を中心とした「新右翼」出身者が党内で台頭し、FNを異議申し立ての政党から政権政党へと転換させる試みが進んでいる。

そのようなFNの変化はその支持基盤の変化に対する適応であり、そのナショナル・ポピュリズム路線のさらなる明確化でもあった。そして、90年代のFNは、ナショナルでポピュリストな極右としてのアイデンティティを維持しながら、政権政党へと脱皮するという困難な課題に挑戦することになる。

その課題は、FNを本質的な部分において変化させる可能性を孕んでおり、ポスト・ルーペンの後継者問題ともリンクしている。

結成以来25年以上を経過したFNは、当然、初期の極小集団の時期に比べて、目を見張る変化を呈している。それでは、FNは共和制の制度的枠組みを承認し、議会制民主主義のアクターとして政権を争う「普通の政党」になったのであろうか。すなわち、FNは反体制的な「極右 (extrême-droite)」ではなく、右翼陣営で保守政党より急進的なポジションをとるに過ぎない「極端な右翼 (droite extrême)」になってしまったのだろうか。本稿では、1990年代のFNに焦点を当てて、その変容を紹介し、世紀末のFNの全体像を探ってみたい。それは、「極右」か「極端な右翼」かという、FNの本質的な性格についての問いに答える作業にもなるだろう。そして、最後に、新しい世紀におけるFNの可能性にも触れてみたい。それは、1972年に、大いなる志を抱いて極右の革新と再編に乗り出したルーペンの夢の終着点を探ることでもある。

- (1) 1990年代までのFNについては畑山『フランス極右の新展開―ナショナル・ポピュリズムと新右翼―』(国際書院, 1997年), 山口定・高橋進編『ヨーロッパ新右翼』(朝日新聞社, 1998年) 第3章を参照。
- (2) FNについての文献の刊行が、FNへの世論の関心の動向をよく示している。最初のFNに関する文献は、1984年の欧州議会選挙での突然の躍進を契機に刊行される。FNの突然の躍進を説明することを目的としたジャーナリストによる文献が多いことがこの時期の特徴である。次に研究文献が多く現れる時期は、FNが14.4%の得票を記録した1988年大統領選挙の後にやってくる。FNの予想外の得票によって、世論のFN現象への関心も高まり、また、最初の躍進から時間も経過したこともあり、80年代末から90年代始めにかけて、研究者による様々な角度からの本格的な研究が発表され、FN研究は飛躍的に進展する。その時期の代表的業績がN. Mayer et P. Perrineau (éd.), *Le Front national à découvert*, Presses de la Fondation nationale des sciences politiques, 1989, G. Birenbaum, *Le Front national en politique*, Balland, 1992. であった。そして、1995―98年は、FNに関する文献の出版ラッシュの様相を呈している。1995年大統領選挙、1997年国民議会選挙でFNが従来得票記録をさらに伸ばしたこともあるが、1995年市町村議会選挙で3つの自治体で、97年2月にもヴィトロールでFNが市政を掌握したことが、世論のFNへの関心を高め、多くの文献の刊行につながったと思われる。
- (3) *Le Monde*, mardi 25, samedi 29, dimanche 30-lundi 31 mars 1997.

第1章 1990年代の選挙における国民戦線

第1節 1990年代の選挙と国民戦線

1990年代に入っても、産業再編と失業問題を始めとした経済危機、移民や犯罪、エイズなどの深刻な社会問題はフランス国民を悩ませていた。特に、失業問題は、フランスの経済・社会的危機を象徴していた。1985年に10%を超えた失業率は、89年には10%を割るが、92年には再び10%を超えた。そして、ついに1996年には12%を突破する。その増大は、失業手当や職業訓練、雇用促進、退職奨励などのための公的支出を膨らませ、家族崩壊、単親家族の増加、学業放棄などの貧困や排除の現象を強化している⁽¹⁾。

フランス社会は、個人を超えた力で翻弄される脆弱で不安な社会に突入している。規制の経済的・社会的メカニズムがもはや機能せず、経済的マシンは制御不能で、個人が社会の中でもて遊ばれ非人格的な市場の力に支配されていると感じる時、国民の間に不安の感情が頭をもたげる。そこから、社会関係や民主主義的生活形態を腐食する一連の幻覚や悪影響が派生する⁽²⁾。

そのような危機や不安に有効に対処できない政治に対する信頼は大幅に低下する。そのような現象は90年代に始まったことではなく、既に、1980年代からいくつかの現象によって、政治的代表制の危機として取りざたされていた。すなわち、投票率の低下、政党・労働組合などの中心的な代表制度の危機、政治家への信頼性の低下といった諸現象によって、政治的代表制は大きく傷ついていた⁽³⁾。1990年代中葉の選挙は、フランス社会の抱えている諸問題に対する政治的リーダーたちの問題解決能力への懐疑と政治腐敗に対する憤りの雰囲気の中で行われた。

そのような政治不信は、15年間にくり返された政権交代が有権者にもたらした失望にも由来していた。1995年大統領選挙に際しての世論調査機関SOFRESによる調査では、政権についた左右両翼は常に変わりばえしないし、左翼・右翼に関わりなく、統治者たちは庶民の抱えている問題を理解していないという感情が広まっていた⁽⁴⁾。

そのような90年代の危機と不安の雰囲気を養分に、FNは着実に票を伸ばしていった。1988年大統領選挙を例外に、200万票台の得票であったFN票

表 1－1 1984年欧州議会選挙での躍進以降のFNの得票

年	選 挙	得 票 数	有効得票率
1984	欧 州 議 会	2,210,334	10.9%
1986	国 民 議 会	2,707,278	9.7
1986	地 域 圏 議 会	2,658,500	9.6
1988	大 統 領	4,375,894	14.4
1988	国 民 議 会	2,359,228	9.7
1989	欧 州 議 会	2,129,836	11.8
1992	地 域 圏 議 会	3,375,079	13.6
1993	国 民 議 会	3,159,477	12.4
1994	欧 州 議 会	2,050,086	10.5
1995	大 統 領	4,571,138	15.0
1997	国 民 議 会	3,783,623	14.9
1998	地 域 圏 議 会	3,270,118	15.3

は、1992年地域圏議会選挙では約338万票を記録し、初めて300万票台に乗っている。90年代のFNは、94年欧州議会州議会選挙を除き、コンスタントに300万票以上の得票を維持している（表1－1）。特に、カリスマの党首ルペンのパーソナリティが票の上乗せを可能にする大統領選挙と違って、各選挙区での候補者の魅力や地方組織の集票力が大きくものをいう国民議会選挙で、90年代にはいって選挙ごとに票を伸していることは、党の力が着実に強化されていることを物語っている。そして、同様に、地域圏議会選挙での得票率の伸張、1995年市町村選挙での3つの自治体の掌握なども、FNの地方組織の充実による集票力の向上を示しており、FNはフランスの全国・地方政治の場で、完全に市民権を得るまでになった。

まず、1990年代の国政・地方選挙での、FNの順調なパフォーマンスを見ておこう⁽⁵⁾。1990年代の選挙は、92年の地域圏議会選挙で始まる。地域圏議会選挙は、県別の比例代表制によって実施され、FNのような小政党にとって比較的有利なタイプの選挙であった。同選挙では、FNは約338万票(13.6%)を得票し、前回の地域圏議会選挙よりも大幅に票を伸ばしている。

1993年国民議会選挙では、FNは約316万票(12.4%)を獲得しているが、小選挙区制の壁に阻まれて議席はゼロに終わっている。前年の地域圏議会選

挙よりは得票数でも得票率でも後退しているが、1988年国民議会選挙と比較してみると大幅な伸びを見せている。

1994年欧州議会選挙では、FNは約205万票(10.5%)の得票に終わり、1989年欧州議会選挙より票を減らしている。同選挙は、90年代の選挙で唯一FNが後退しているものである。

今回の欧州議会選挙は、マーストリヒト条約が選挙の争点になり、反マーストリヒト陣営には、FNの他にCh・パスクワ(Charles Pasqua)、Ph・セガン(Philippe Seguin)、Ph・ドヴィリエ(Philippe de Villiers)が加わった。ドゴール派が欧州統合に好意的な立場に転じた後は、FNが右翼陣営内で統合反対の立場を独占してきた観があったが、今回は、そのような有利な条件が崩れた。

結局、ドヴィリエのリストは12.4%を獲得し、高齢者や熱心なカトリックなどの伝統的な保守支持層でFNの浸透を抑えた。また、左翼政権への不満票は、ポピュリスト的人気をもつ青年実業家B・タピ(Bernard Tapie)によって吸収された。ドヴィリエとタピというナショナリストとポピュリストの攻勢に挟撃されたFNは、得票を伸ばすことができなかった⁽⁶⁾。

1995年大統領選挙は、第5共和制の選挙の歴史で初めて「真の危機の選挙」(P・ペリノー)と言われている。そのことは、今回の有権者の問題関心からも明らかである。有権者の最大の関心は失業問題であり、次いで、社会的不平等、購買力・賃金、社会的排除・貧困、社会保障・老後といった諸問題が続いている。彼らは、個人・職業的な将来に大きな不安を抱えており、「根本的変革」を望んでいた⁽⁷⁾。

1995年大統領選挙は、第1回投票で約457万票(15%)を得票し、前回88年の14.4%を凌いでFNの選挙史上で最良の成果を記録する。ルペンは、社会党のL・ジョスパン(Lionel Jospin)、RPR(共和国連合)のJ・シラク(Jacques Chirac)とE・バラデュール(Edouard Balladur)に次いで第4位につけた。FNの全国書記長(当時)であったC・ラング(Carl Lang)は、大統領選挙の「2人の勝利者はジョスパンとルペン」とその成功を誇っている⁽⁸⁾。

FNは全国で票を伸ばし、バ＝ラン、オー＝ラン、モーゼル、ロアール、ブーシュ＝デュ＝ローヌ、ヴオークリューズ、ヴァルの諸県でトップに立ち、

ニース、マルセイユ、トゥーロン、ペルピニャン、ドルー、ミュルーズなどの自治体で第1党になっている。そのような人口過密で、失業に直面し、社会の変化に揺さぶられている地域で、ルペンは高いスコアを記録している⁽⁹⁾。

1997年の国民議会選挙の第1回投票では、FNは約378万票(14.9%)を獲得し、それは国民議会選挙としては過去最高のスコアであった。1988年9.7%、1993年12.4%と着実に票を伸ばしてきたFNは、15%に迫る票を獲得するまでになっている。

今回の選挙では、95年の大統領選挙での勢いをそのまま維持した形となったが、それはFNにとっては大きな成果であった。と言うのは、14.4%という好成績を記録した1988年大統領選挙の直後に行われた国民議会選挙では、得票率が9.7%と低迷しているからである。大統領選挙の直後に国民議会の解散総選挙が実施されることはある程度予測できたが、今回の場合は、シラクによる任期を約1年残しての突然の解散であり、候補の擁立や選挙資金などの面での準備不足を跳ね返しての成功だけに、FNは自信を深めることになった。

また、ルペンのパーソナリティが決定的な役割を果たす大統領選挙と違って、国民議会選挙が、党と候補の集票力が問われるタイプの選挙であることを考えると、国民議会選挙で大統領選挙と同等の集票力を発揮したことは、FNの組織的力が充実してきたことを物語っている。

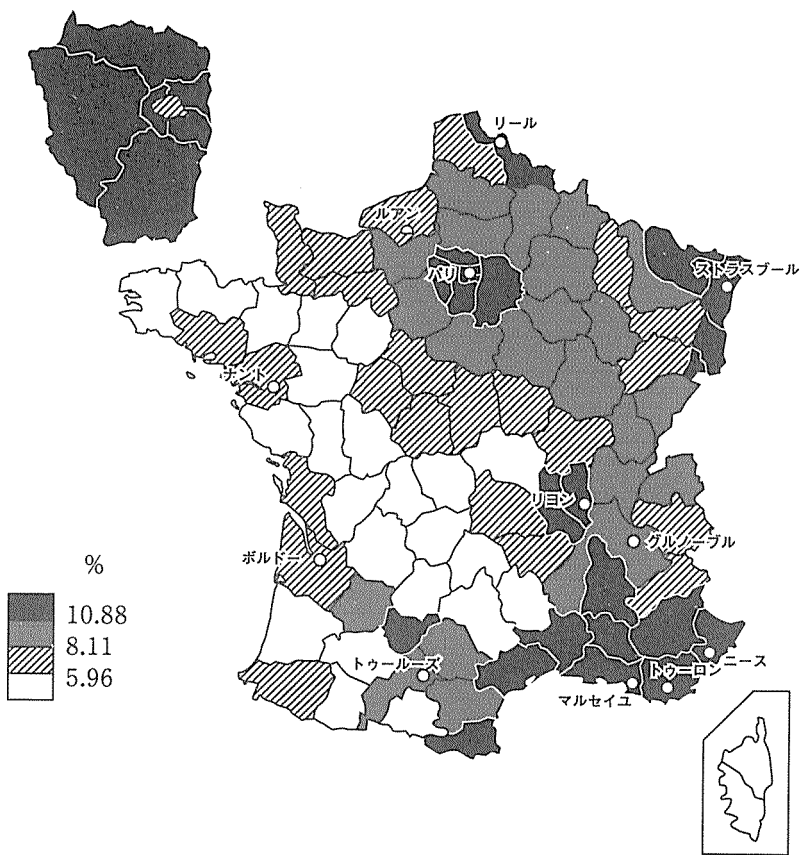
そのことは、FNが全国的に集票力を高めていることによっても証明されている。1986年、1988年の国民議会選挙では1/5の県でしか10%を超えなかったが、1993年国民議会選挙では1/3の県で、そして、1997年国民議会選挙では実に1/4の県で10%を超えている。同様に、FN票が20%を超える県の数も、1993年4、1997年16と急速に伸びている。逆に、10%を下回る県は、1993年33、1997年23と減少しており、得票率5%を割った選挙区も、今回は1つだけで、1988年国民議会選挙での54選挙区、1993年国民議会選挙での10選挙区と比べても大幅に減少している。

最後に、1998年の地域圏議会選挙と県議会選挙であるが、両選挙でもFNの勢いは止まっていない。地域圏議会選挙では、約327万票(15.3%)、県議会選挙では約154万(13.9%)を得票している。今回の地域圏議会選挙は、前

回と比べて得票数では減少しているが、今回は棄権率が約42％に達したことにその主要な原因がある。そのような条件の中で、FNは得票率自体は1.4％伸ばしており、善戦していると言えよう。県議会選挙でも、小選挙区の壁で当選者自体は3人にとどまっているが、1994年の10％から大きく得票率を伸ばしている。

各種選挙の結果から、FNが、1994年欧州議会選挙を除いて、1990年代の国政・地方選挙で順調に票を伸ばしていることが確認できた。それでは次に、

地図 1－1 1988年国民議会選挙での極右の得票分布

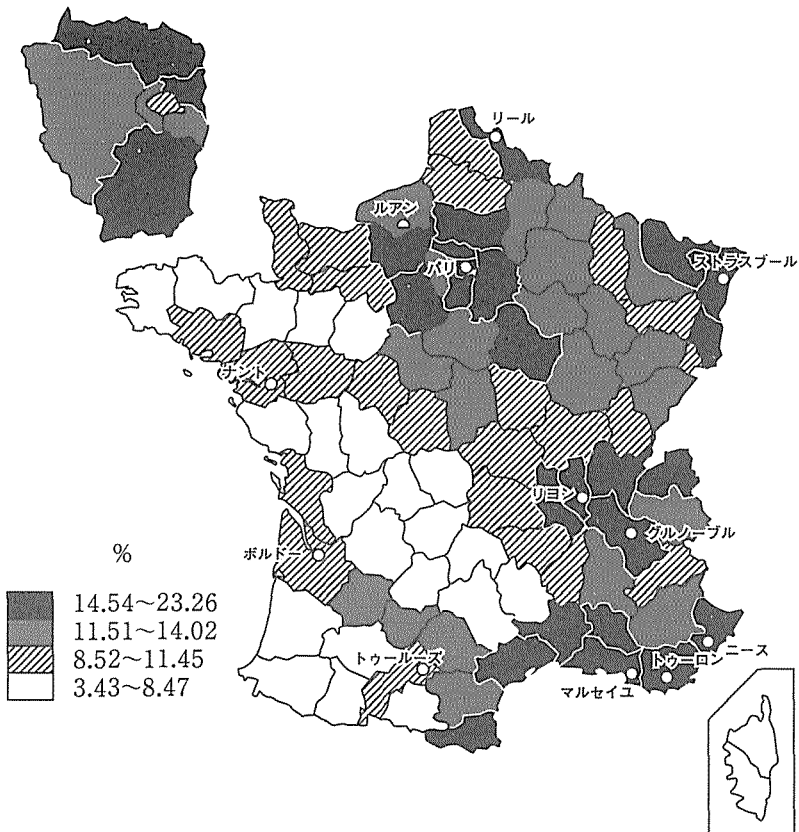


出展：P. Perrineau, *Le Symptôme Le Pen. Radiographie des électeurs du Front national*, Fayard, 1997, p.56.

FNの得票の実態をより具体的に分析してみよう。

1990年代のFNの得票分布であるが、驚くほど80年代のそれと変わっていない。そのことを確認するため、ここでは80年代と90年代の国民議会選挙でのFNの得票分布を紹介しておこう。1988年国民議会選挙(地図1ー1)、93年国民議会選挙(地図1ー2)、97年国民議会選挙(地図1ー3)の各選挙での得票地図を比べれば、FNの得票分布が基本的に酷似していることが分かる。すなわち、従来からFNは、ルアーヴルーヴァランスーペルピニャンを

地図1ー2 1993年国民議会選挙でのFNの得票分布

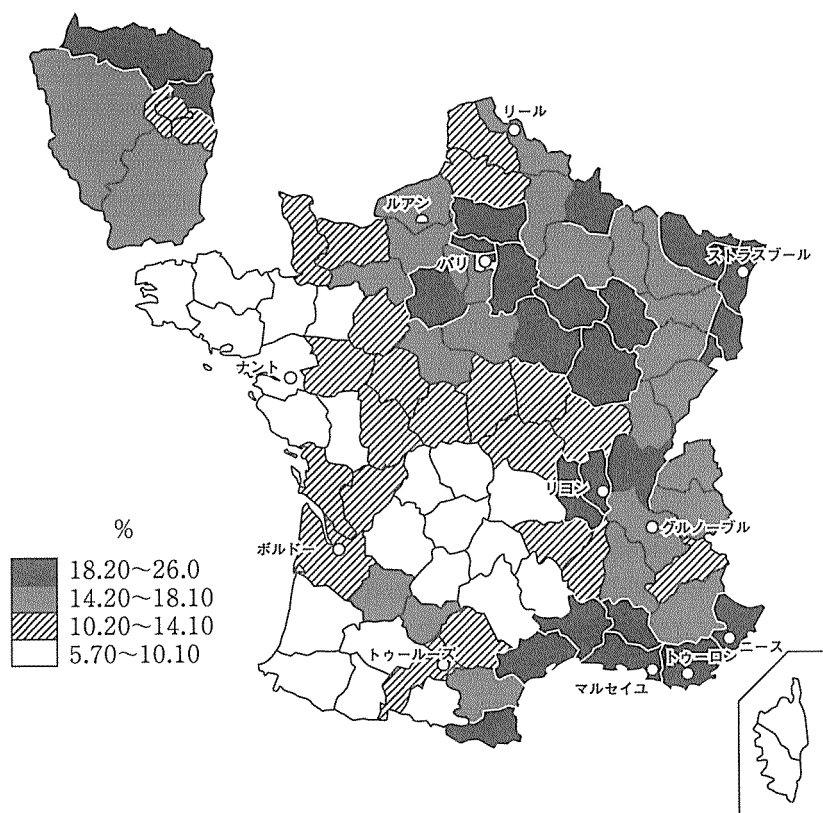


出展：P. Perrineau, *Le Symptôme Le Pen. Radiographie des électeurs du Front national*, Fayard, 1997, p.77.

結んだ線の東側で多くの票を集めており、彼らの運動は工業・都市的フランスの現象であったが、FNの台頭時から見られるそのような特徴は、90年代においても基本的に持続していた。

1997年国民議会選挙を例にとってFNの伸張を分析した研究では⁽¹⁰⁾、パリを囲む諸県とウール、オアーズ、マルヌ、ヴォージュ、コート＝ドールを通過してロアル＝エ＝シェールからヨンヌに至る諸県で、FNの伸張は特に目覚ましい。そのような地域は、一般に、人口構成が若く、アクティブで労働

地図 1－3 1997年国民議会選挙でのFNの得票分布



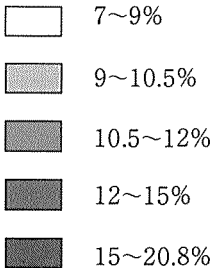
出展：P. Perrineau, *Le Symptôme Le Pen. Radiographie des électeurs du Front national*, Fayard, 1997, p.97.

者、外国人の割合が多い地域である。また、1970―80年代に脱工業化が急速に進み、失業が増大し、地域社会の解体が目立つ地域でもある。逆に、フランス西部と南西部の最も農村的なフランスでは、タルン＝エ＝ガロンヌ、ロット＝エ＝ガロンヌなどの例外を除いて、FNの勢力拡大は見られない。

1990年代の中葉、フランスには300万人の失業者、100万人の最低賃金で働く人々、多くの不安定な雇用形態のもとで働く人々がおり、1200万人のフランス人が生活の「不安定化」を経験していると言われている⁽¹¹⁾。社会的・都市的危機に苦しむ地域は大都市部から、準都市部や農村部にも拡大しており、そこに充満している、現実のもしくは想像上の政治危機と政治腐敗の雰囲気はFNを勢いづけている⁽¹²⁾。

地図 1－4　困難にある産業での就業者の分布

製鉄業、BTPでの
就業者の割合



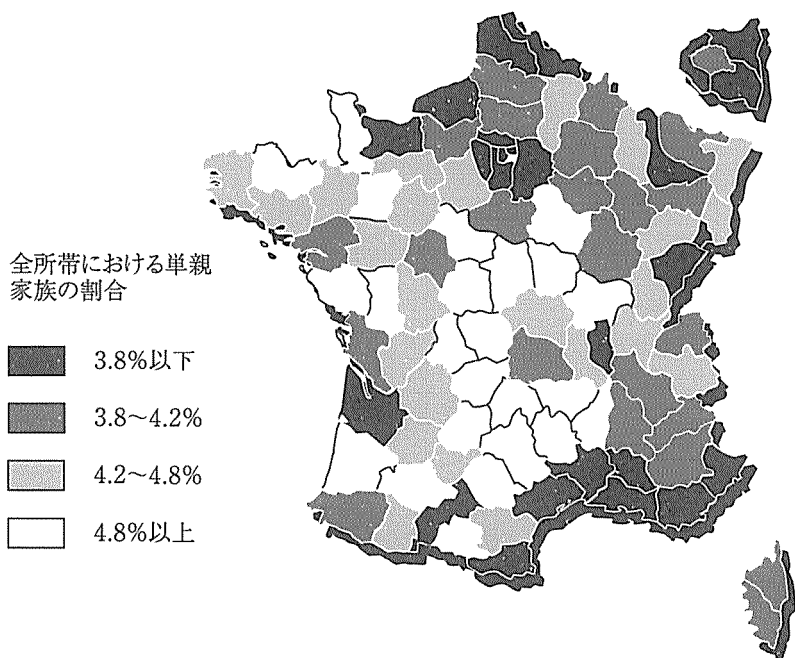
資料：INSEE, 1990年度人口総合調査

出展：M. Souchard, S. Wahnich, I. Cuminal et V. Watheir, *Le Pen. Les mots. Analyse d'un discours d'extrême-droite*. Le Monde-Éditions, 1997, p.190.

そのことは、困難にある産業での就労者の分布（地図1－4）や単親家庭の分布（地図1－5）とFN票のそれが相関していることから明らかである。特に、単親家族の分布とFNの得票分布は極めて類似しており、経済的・社会的困難を抱えて、伝統的な家族構造の解体による個人の不安定化が進んでいる地域でFNへの支持が拡大している。産業再編による失業への不安に襲われている地域との重なりとともに、FNが伸張している地域の特色を浮き彫りにしている⁽¹³⁾。

また、1993年から97年への国民議会選挙でのFN票の伸びは、棄権の動向とも極めて相関している（表1－2）。棄権が減少している選挙区の場合、FN票は伸張し、棄権が増大している選挙区の場合、FN票は減っている。ま

地図1－5 単親家族の分布



資料：INSEE, 1990年度人口総合調査

出展：M. Souchard, S. Wahnich, I. Cuminal et V. Watheir, *Le Pen. Les mots. Analyse d'un discours d'extrême-droite*. Le Monde-Éditions, 1997, p.190.

表 1-2 1993年―1997年の国民議会選挙における棄権率とFN票の推移

棄 権 率 の 推 移	FN票の推移
大きく減少している選挙区全体 (−1%以上)	+0.89
少し減少している選挙区全体 (−0.05~−0.96%)	+0.54
安定している選挙区全体 (−0.05~+0.75%)	+0.02
わずかに増大している選挙区全体 (+0.75~+1.59%)	+0.01
著しく増大している選挙区全体 (+1.6%~+2.69%)	−0.43
大きく増大している選挙区全体 (+2.70以上)	−1.20

出典：P.Perrineau et C.Ysmal, *Le vote surprise. Les élections législatives des 25 mai et 1er juin 1997*, Presses de Sciences Po, 1998, p.262.

た、FNが最も伸びている10県のうち8県で、全国の傾向とは逆に棄権が減っている⁽¹⁴⁾。棄権が政治システムの機能や正統性に向けられた批判的警告であり、民主主義の機能への疑問であるとするれば⁽¹⁵⁾、そのようなFN票と棄権の相関は、90年代のFNへの投票が、政治不信の強い選挙区で抗議票として機能していることを物語っている。

以上のように、1990年代におけるFNの選挙での得票やその分布を見たが、そこには80年代に比べて顕著な質的变化が観察されるわけではない。むしろ、全国的に集票力をさらに高め、得票分布においては、従来強力であった地域でさらに票を伸ばし、弱い地域とのコントラストが一層鮮明になっている。本節では、FNの全体的な得票の増加と工業・都市的フランスでの集票力のさらなる強化という、80年代の延長線での量的発展という側面を確認したが、次節では、FN支持者の変化に焦点を当てることで、FNの質的变化の側面を見てみよう。

- (1) B. Marcel et J. Tafé, *Le chômage aujourd'hui. Analyses et perspectives*, Nathan, 1997, pp.45-9, 169-81. FNが政党システムに参画し、定着する1980―90年代のフランスの政治と社会については、渡邊啓貴『フランス現代史』（中央公論社、1998年）を参照。
- (2) J.-P. Fitoussi et P. Rosanvallon, *Le nouvel âge des inégalités*, Éditions de Seuil, 1996, p.63.
- (3) H. Portelli, “Le débat sur la crise de la représentation politique”, *Regard sur l'actualité*, no.209-210, mars-avril 1995, p.43.

- (4) G. Le Gall, “Présidentielle 95: une opinion indécise”, *Revue politique et parlementaire*, no.976, mars-avril 1995, p.12.
- (5) 1990年代の選挙については、土倉完爾「フランス1993年総選挙—政界再編の足音—」『選挙研究』（日本選挙学会年報），No.9（1994年3月），同「フランスにおける選挙制度と政治形態—1995年大統領選挙に関連して—」『法学論集』第45巻第4号（1995年10月），岩本勲「1995年大統領選挙と1995年市町村議会選挙」『大阪産業大学論集 社会科学編』101号（1996年3月），中木康夫「シラク政権の成立—1995年フランス大統領選挙—」『朝日法学論集』16号（1997年7月）を参照。
- (6) P. Perrineau, *Le Symptôme Le Pen. Radiographie des électeurs du Front national*（以下 *Le Symptôme* と略す），Fayard, 1997, p.79, Le Gall, “Européennes 1994: implosion de la gauche et droitisation de la droite”（以下 “Européennes” と略す），*Revue politique et parlementaire*, no.971, mai-juin 1994, p.12.
- (7) *L'Élection présidentielle, numéro spécial des dossiers et documents du Monde*, Le Monde, 1995, p.49. そのような社会的危機の雰囲気は，FNの得票にも影響を与えている。もともと，FNは移民問題と関係した地域で大量に得票してきた。今日でも，確かに，移民問題は重要な争点でありつづけてはいるが，ルペン票は，ますます，社会的ネットワークの解体現象と一体化している [E. Todd, “Le Pen: la menace”（以下 “Le Pen” と略す），*Le Nouvel Observateur*, 27 avril-3 mai 1995, p.38.]。
- (8) M. Soudais, *Le Front national en face*, Flammarion, 1996, p.61.
- (9) *L'Élection présidentielle*, p.44.
- (10) P. Perrineau et C. Ysmal, *Le vote surprise. Les élections législatives des 25 mai et 1er juin 1997*, Presses de Sciences Po, 1998, pp.260-1.
- (11) Le Gall, “La tentation du populisme” in SOFRES, *L'État de l'opinion 1996*, Seuil, 1996, p.190.
- (12) Perrineau, *Le Symptôme*, p.98.
- (13) M. Souchard, S. Wahnich, I. Cuminal et V. Wathier, *Le Pen. Les mots. Analyse d'un discours d'extrême-droite*, Le Monde-Éditions, 1997, p.193.
- (14) Perrineau, *Le Symptôme*, p.98.
- (15) F. Subileau, “Une participation en baisse depuis dix ans”, *Revue politique et parlementaire*, no.993, mars-avril 1998, p.54.

第2節 国民戦線支持者の変容—「プロレタリア化」の昂進

E・トッド (Emmanuel Todd) は，1981年から93年を「民衆困惑の時期」として，共産党衰退の開始（1981年），FNの登場（1984年），ルペンへの支持の高まり（1988年），県議会選挙での棄権の増大（1989年），マーストリヒト条約への予想外の反対（1992年），社会党の衰退（1993年）といった現象

は、民衆の有権者の動向によって生み出されたものと指摘している⁽¹⁾。つまり、フランス政治の変容は、労働者と資本家の対立モデルではなく、中間層（上級管理職、中間管理職）と民衆（労働者、事務職）の対立モデルによって解釈でき、マーストリヒト条約をめぐる激しい対立は、典型的にそのような対立を表現しているとされる。

そのような解釈の適否はともかく、もはや、投票行動が階級的なクリーヴィジを軸に展開されず、争点ごとに、社会的利益や地位に沿っても政治的判断が組み立てられているのは確かであろう。自分たちの利益が政治社会の中で代表されていないと感じている非エリートの有権者は、政治社会を見捨てたり（棄権）、既成の政治的代表への異議申し立てへと走っているのは確かである。そのような民衆の有権者が政治を動かす時代は、1990年代に入っても持続している。そして、民衆の有権者の社会的不安や政治への不信を利用して、その政治的動員に最も成功するのがFNであった。

故に、第1節で見たように、今日でも、FNの強い地域は都市的で民衆的な地域であり、就労人口の中で労働者の割合が多い地域である。だが、1980年代と90年代では、FN支持者の性格は大きく変化している。

A・ビール（Alain Bihl）は、FN支持者の変化について2つの時期に区分している⁽²⁾。簡潔に言えば、1980年代末までは、「プロレタリア層」よりは農業従事者、商人、手工業者などの伝統的中間層の支持に依拠していたが、90年代以降は、「プロレタリア層」（事務職、労働者）での支持を拡大している。すなわち、1984年から87年までは、FNが最も支持を調達していたのは伝統的中間層においてであり、いわゆる「ブティックの世界」の最も右よりの部分が、左翼政権の成立に対する危機感によってFNに流入してきた。初期のFNの躍進を支えたのは、社会層としては伝統的中間層を中心とし、政治的には保守を支持してきた有権者であった。

1988年から1989年にかけて、労働者・事務職員の「アトリエの世界」が、「ブティックの世界」に合流する。民衆的抗議（アトリエ）とブルジョワの抗議（ブティック）の結合が実現したことが、1988年大統領選挙でのルペンの14.4%という記録のスコアを可能にした。

1990年代に入ると、FNに走った「ブルジョワ的」支持者の一部が保守に

よって回収され、特に、上級管理職と自由業でのFN離れが顕著になる。逆に、民衆層でFNへの支持は伸びていく。特に、労働者層での支持は、1993年国民議会選挙18%、94年欧州議会選挙21%、95年大統領選挙30%と一貫して上昇していく（表1-3）⁽³⁾。

1995年大統領選挙でルペン票の「プロレタリア化」は顕著になる。1988年大統領選挙では、労働者層で19%であった得票は、今回は30%まで伸び、失業者層でも13%増加している。他方、商業・手工業・自営で13%、上級管理

表1-3 1984-1997年の国政選挙でのFN投票者の変化

	1984 欧州議会	1986 国民議会	1988 大統領	1988 国民議会	1989 欧州議会	1993 国民議会	1994 欧州議会	1995 大統領	1997 国民議会	84-97 の変化
FN得票率	11	10	14.4	10	12	12.4	10.5	15	15	+ 4
性 別										
男 性	14	11	18	12	14	14	12	19	18	+ 4
女 性	8	9	11	7	10	13	9	12	12	+ 4
年 齢										
18-24	10	14	16	15	9	18	10	18	16	+ 6
25-34	11	10	17	9	8	10	15	18	19	+ 8
35-49	12	11	17	8	12	13	10	15	15	+ 3
50-64	12	9	11	10	15	13	12	17	15	+ 3
65以上	10	6	12	10	12	13	7	9	12	+ 2
職 業										
農業・農業賃金労働	10	17	13	3	3	13	4	16	4	- 6
商業・手工業・自営	17	16	27	6	18	15	12	14	26	+ 9
上級管理職・自由業	14	6	19	10	11	6	6	7	4	-10
中級管理職・事務職	15	11	13	8	9	13	9	16	14	- 1
労働者	8	11	19	19	15	18	21	30	24	+16
無職・退職	9	8	12	9	13	12	9	11	15	+ 6
社会的地位										
自営業	13	13	21	7	10	12	6	11	12	- 1
公共部門雇用者	8	8	11	9	7	12	4	15	12	+ 4
私的部門雇用者	15	14	17	13	14	16	17	21	19	+ 4
失業者	—	—	12	—	—	—	28	25	15	—
無 職	—	—	12	9	13	12	9	11	14	—

出典：P. Perrineau, *Le Symptôme Le Pen. Radiographie des électeurs du Front national*, Fayard, 1997, p.102. より作成。

職・自由業で12%減少している。ペリノーは、そのようなFNへの民衆的支持を「左翼ルペニズム (gaucho-lepénisme)」と呼び、ブルジョワ的抗議票から民衆的絶望票へとFN支持者の変化が進んでいることを指摘している⁽⁴⁾。

そのような現象は、労働者層が産業再編と失業に対して抗議するためにルペンに投票したことに由来している。治安と移民への不安という1980年代にFNの躍進を支えたテーマに加えて、経済的困難から由来する問題が、FNに新たな支持層をもたらした⁽⁵⁾。

1997年国民議会選挙においてもFNは大健闘するが、そのこともFN支持者の動向で説明できる。すなわち、今回の勝因は、商人、手工業者といった、1984年の躍進に貢献した社会層でも支持を動員できたことにある。いわゆる「アトリエとプティックの結合」を再現できたことが、FN票を膨らませたのである⁽⁶⁾。1993年国民議会選挙、1995年大統領選挙では保守政党 (RPR・UDF＝フランス民主連合) に流れたそのような社会層は、1997年国民議会選挙では、バラデュールやシラクへの失望からFNへと向かった⁽⁷⁾。

確かに、1997年国民議会選挙を見てみると、労働者では1995年大統領選挙と比べて6%後退し、28%の社会党にトップの座を明け渡している。だが、同じ種類の選挙で比較すれば、1993年国民議会選挙に比べて6%増加しており、FNへの労働者の支持は基本的に持続していると言える。

1990年代のFNの選挙での健闘は、その支持者の「プロレタリア化」に起因していることは分かったが、より正確には、民衆化は、労働者・事務職での支持の増加だけではなく、社会的に困難な層の支持の増加を意味している。そのことは、表1―4から明らかである。FN投票者の主観的な社会階層意識に関して、1993年と1997年の国民議会選挙を比べて見たとき、特権的社会層、裕福な社会層、上層中間層においては、現状維持かマイナスである。それに対して下層中間層以下の社会層では、いずれもプラスである。特に、恵まれない社会層では+9%と最大の伸びを記録している。その恵まれない社会層と自分をみなしている人々の間では、58%がFNに近いと回答し、RPR・UDFの13%、左翼政党の8%、支持なしの21%を大きく引き離している⁽⁸⁾。

結論的に言えば、1990年代のフランスにおいて、その要求や困惑が「ノーマルな」政治社会で無視されている労働者、事務職、失業者の中の「疎外さ

表 1—4 FN投票者の主観的な社会階層帰属

主観的社会階層 (%)	1993	1997	増 減
特権的社会層	8	8	——
裕福な社会層	10	10	——
上層中間層	11	10	- 1
下層中間層	13	16	+ 3
民衆的社会層	16	21	+ 5
恵まれない社会層	20	29	+ 9

出典：G. Le Gall, “Succès de la gauche quatre ans après sa déroute de 1993”, *Revue politique et parlementaire*, no.989, juillet-août 1997, p.19.

れた集団（groupe aliéné」が向かった先が極右だった。1990年代に新たにFNに合流した支持者の中には、政治社会の外部に取り残され、「疎外状況」にあるものが多く含まれていた⁽⁹⁾。

1990年代に入って、FN支持者は、労働者・事務職員を中心とする民衆的な社会層で増大し、そのことはFNのポピュリズム的色彩の強化に貢献することとなる。

さて、民衆的社会層でのFN支持の増大は、政治的傾向の点では旧左翼支持者の流入を意味していた⁽¹⁰⁾。本来、そのような民衆的社会層の多くは共産党・社会党によって政治的に代表されてきた。しかし、政権の座にあった左翼は、次第に民衆的社会層の支持を失っていった。その少なからぬ部分が、FNへと支持を移している。例えば、1997年国民議会でのFN投票者のうち、1993年国民議会選挙では14%が左翼・エコロジストに投票しており、保守への投票者25%の半分を超えている⁽¹¹⁾。同様に、97年国民議会でのFN投票者は、95年大統領選挙では61%がシラクに投票しており、28%はジョスパンに投票している⁽¹²⁾。

特に、1990年代に入っの社会党支持率の壊滅的低下から、FNは、明確に利益を得ていた。と言うのは、1988—95年の時期における社会党票の低下とFN票の増加とは強い相関関係を示しているからである。1995年大統領選挙を例にとれば、88年大統領選挙でのミッテランの得票に比べてジョスパンが最も大きく後退している地域で、ルペン票は大きく伸びている。すなわち、パリ、オート＝ノルマンディ、ピカルディ、ノール＝パ＝ド＝カレ、シャン

パーニュ＝アルデンヌなどの地域であった。その時、左翼から流入してきたFNの新しい支持層は、1995年大統領選挙の第1回ではルペンに投票し、第2回ではジョスパンを選択する傾向を見ている⁽¹³⁾。

1988年から1997年の間に、FNが社会党票を食って最も伸びている地域、つまり、「左翼ルペニズム」の地盤は労働者が多く居住している県であり、産業再編に最も曝されている地域である。それは、ノルマンディからピカルディ、ノール＝パド＝カレ、シャンパーニュ＝アルデンヌを通して、ロレーヌに至る地域である⁽¹⁴⁾。

それまで、FNの問題は、選挙協力の是非についての議論を中心として、保守陣営に突きつけられた政治的問題であった。しかし、1990年代に入ると、社会党からの民衆的支持層の離反と並行して、FNへの民衆的社会層の支持は増大し、地域によっては日常活動においても、FNの活動量に凌駕されていく。FNの存在は、左翼に突きつけられた社会的問題となっていく⁽¹⁵⁾。

次に、1990年代のFN支持者について、その発想や考え方について見ておこう。表1－5から、世紀末のFN支持者のイデオロギー的特徴が浮かび上がってくる。FN支持者の政治的立場について、左翼と保守の中間の位置にある項目については薄い彩色、左翼・保守より極端な立場をとっている項目には濃い彩色をしてある。さて、FNが極端な立場をとっている項目は、経済ではフランスの経済と国家の独立性に関するものである。政治の最後の2つの欧州統合に関する項目も合わせて、FN支持者のナショナリズムの心情の強さが表現されていると同時に、経済の国際化への不安・反感が読み取れる。1990年代に、マーストリヒト条約反対の立場を鮮明にし、「国際主義(mondialisme)」をフランスにとって最大の脅威として告発するFNの主張が受容される条件が存在していた⁽¹⁶⁾。

社会の項目では、FN投票者の極端な立場をとる項目は、移民に関するものと、死刑復活、教育での規律と努力といった権威主義的で秩序指向的なものが目につく。エスノセントリックで権威と秩序の回復を望む1980年代の支持者像は、90年代にも持続している。

政治の項目では、政治家・政党、民主主義制度への強い不信を特徴としている。政治腐敗の頻発と政治の問題解決能力の欠如に直面して、FN支持者

表 1-5 1997年国民議会選挙でのFN投票者の経済・社会・政治的態度

	共産党	社会党	RPR UDF	FN	全 体
経 済					
「利潤」という言葉はポジティブ	32	47	63	56	52
「民営化」という言葉はポジティブ	23	38	73	59	53
「リベラリズム」という言葉はポジティブ	50	55	82	68	66
サラリーマンの状況の改善を優先	85	77	47	64	66
欧州統合でフランスは国際化の危険性からよりよく守られる	52	67	72	38	61
消費者がより高い商品を買うとしても、外国製品の輸入制限が必要	56	51	55	66	55
国際化は経済的領域で大きな操作可能性をフランス政府にまだ残している	35	42	53	29	41
社 会					
教育は何よりも規律と努力の意味を与えるべき	45	42	58	73	51
フランスには移民が多すぎる	48	45	69	94	59
フランスにきたマグレブ系移民はいつの日か他の人々同様にフランス人になる	70	70	61	35	62
死刑制度の復活が必要	39	36	54	83	50
1995年11-12月のストに連帯する	85	75	23	41	53
最低賃金の月千フランへの増額賛成	65	41	26	44	41
35万人の公共部門での雇用創出に賛成	57	48	25	33	40
民衆のもしくは恵まれない社会層に帰属していると感じている	33	23	10	26	20
個人的・職業的将来にかなり不安	71	64	54	81	66
政 治					
政治に非常に関心を持っている	62	55	51	46	48
特定の政党に近いと感じている	53	49	44	28	36
政治家は人々の関心事に全く関心を持っていない	39	28	18	58	33
民主主義は機能していない	67	57	42	77	59
1995年以來のシラクの行動に失望	89	91	40	79	70
左翼の勝利の場合、共産党の入閣を望む	92	77	24	40	52
かなり右翼的	3	2	81	50	33
かなり左翼的	89	86	3	16	41
左翼でも右翼でもない	8	12	16	34	24
欧州人よりフランス人	38	29	37	53	35
欧州統合からフランスは利益を得ていない	60	37	33	63	43
通貨ユーロに反対	55	30	24	65	36

出典：P. Perrineau, *Le Symptôme Le Pen. Radiographie des électeurs du Front national*, Fayard, 1997, p.116.

は政治に強い嫌悪と不信を抱いている。そのような既成政治への否定的評価が、FNへの投票動機として作用していることは明らかである。

興味深いのは、薄い彩色の項目を見ると、スト、最低賃金、雇用創出、サラリーマンの条件改善といった社会的テーマについては保守投票者ほど冷淡ではないことである。また、利潤、民営化、リベラリズムなどの経済的テーマに関しては、保守投票者ほどは共感を示していない。そして、自らを民衆的もしくは恵まれない社会層と判断している者は、左翼と保守の中間で、政治的自己分類でも左翼でも右翼でもないという回答が目立っている。

その結果は、FNの支持層が90年代になって民衆的社会層で増えていることと無関係ではないだろう。1980年代のネオ・リベラリズム的政策が90年代には後景に退き、社会的要求への理解を示すというFNの変身は、そのような支持層の傾向と対応している(第2章参照)。

そのようなFN支持者像は、1997年国民議会選挙でのFN投票者の投票動機からも確認できる(表1-6)。FNの投票者の最も敏感なテーマは、相変わらず移民と治安である。FNへの共感のベースは一貫して不変で、移民問題が90年代でも有力な争点である。

80年代に比べて、関心の高まっているテーマは、雇用・失業である。社会的な不平等の争点での保守に比べての関心の高さとともに、民衆的社会層での支持の増加と対応する結果が見られる。それに加えて、政治腐敗への関心の高さも確認できる。この点も、民衆の有権者の与野党を問わない政治腐敗への嫌悪と反発を反映している。

その他にも、欧州統合への関心の低さは、統合への不安と反発を表現し、女性の役割増大への関心の低さは、彼らの伝統主義的女性観・家庭観を示している。また、環境への関心の低さは、FN支持層が、エコロジスト支持層と異質な性格をもっていることをうかがわせる⁽¹⁷⁾。

以上のことから、民衆的社会層に属し、社会的テーマに理解を示すが権威主義的で、経済の国際化に不安をもち、エスノセントリックでナショナリストな傾向を示すという、1990年代のFN支持者の平均的な像が浮かび上がってくる⁽¹⁸⁾。

そのような民衆的社会層の合流は、左翼と保守から区別された政治的態度

表 1－6 1997年国民議会選挙第1回投票での各党選挙民の投票動機(%)

問い：今日投票する際に、あなたが最も念頭に置いた問題は何ですか？

	全 体	共産党	社会党	エコロ ジスト	R P R U D F	F N
雇用・失業	75	82	82	70	71	67
教育・職業訓練	39	46	49	45	34	21
治 安	35	28	27	18	39	65
社会的不平等	35	44	48	38	21	26
社会扶助	34	47	45	26	24	26
欧州統合	25	18	31	18	30	15
移 民	22	14	15	12	20	67
人種主義との闘争	22	34	33	30	11	6
環 境	19	18	20	60	13	9
経済成長	15	10	15	10	21	11
女性の役割増大	14	20	17	15	11	8
政治腐敗	13	13	13	11	11	22
財政赤字との闘争	12	9	8	7	17	14
経済における国家の役割	12	14	11	7	12	8
所属する社会カテゴリーの防衛	12	14	13	6	10	12
農業への支援	11	9	8	11	14	10
諸制度の良好な機能	10	12	10	9	11	6
国家の近代化	9	6	7	3	14	5
企業の近代化	9	6	8	5	12	7
外交政策	6	4	5	5	7	9
無回答	5	5	3	3	4	5

出典：P. Perrineau, *Le Symptôme Le Pen. Radiographie des électeurs du Front national*, Fayard, 1997, p.178.

と問題関心をもった極右固有の支持層を膨らませ、選挙での安定した得票を可能にしている。そして、F Nの選挙での伸張は、フランスの政党システムに大きな影響をもたらしている。特に、保守勢力にとっては、F Nの存在は深刻な脅威となっている。

- (1) Todd, “Aux origines du malaise politique français. Les classes sociales et leur représentation”, *Débat*, no.83, janvier-février 1995, p.99.
- (2) A. Bihr, *Le spectre de l'extrême droite. Les Français dans le miroir du Front*

national, Les Éditions de l'Atelier/Les Éditions Ouvrières, 1998, pp.21-2. P・ペリノはFN投票者の変化を3期に分けている。第1期1984—86年は、急進化した保守の支持者の流入を中心とする時期。第2期1988—89年は、伝統的中間層の本質的部分を保持しつつ、労働者・事務職の民衆の社会層の中で無視しえない支持を調達し始める時期。そして、1993年に始まり95年に勢いがつく第3期は、伝統的中間層で後退し、民衆層でかつてない伸びを見せていく時期である [Perrineau, “Le FN en 1995: Une question de droite posée à la gauche” in J. Viard (éd.), *Aux sources du populisme nationaliste*, Éditions de l'Aube, 1996, pp.75-6.]。第2期を設定するかどうかの違いはあるが、FNへの伝統的中間層と「プロレタリア的」社会層の支持の動向においては、両者は同じ傾向を指摘している。

- (3) 「プロレタリア層」(労働者・事務職層)での支持拡大といっても、伝統的中間層の支持者が政治的には同質的(本質的には保守からの移行者)であるのに反して、「プロレタリア的」支持者の政治的起源は、左翼・右翼に分かれていた [Bihr, op. cit., p.29.]。
- (4) Perrineau, *Le Symptôme*, p.109.
- (5) J.-Y. Camus, *Le Front national. Histoire & Analyses*, Éditions Oliver Laurens, 1996, pp.70-1. 労働者と事務職での支持の拡大は、失業の物理的・心理的影響の結果である可能性が指摘されている [Bihr, op. cit., p.23.]。
- (6) N. Mayer, “Du vote lepéniste au vote frontiste”, *Revue française de science politique*, Vol.47, no.3-4, juin-août, p.440, Ph. Cohen, *Le bluff républicain. A quoi servent les élections?*, Arléa, 1997, p.277.
- (7) Perrineau et Ysmal, op. cit., p.258, Perrineau, *Le Symptôme*, p.10.
- (8) Le Gall, “Succès de la gauche quatre ans après sa déroute de 1993”, *Revue politique et parlementaire*, no.989, juillet-août 1997, p.19.
- (9) P. Taguieff, *La République menacée*, Les Éditions Textuel, 1996, pp.35-6.
- (10) 民衆の選挙民の支持の調達とともに、ルベン選挙人のイデオロギー的左傾化による、FNの左翼代行的性格の強化については、中木康夫, 前掲論文, 34—44頁参照。
- (11) Perrineau, *Le Symptôme*, pp.98-9. FN支持者で保守と自己分類する回答は、1984年77%, 1988年65%, 1995年53%, 1997年50%と一貫して減少している。保守に対するFNの自立化とも言える傾向が進んでいる [Ibid., p.113.]。
- (12) Mayer, op. cit., p.441. 1995年大統領選挙の第2回投票では、第1回のFN票はシラク51%, ジョスパン28%, 棄権21%に分かれた [Viard, *Pourquoi des travailleurs votent FN et comment les reconquérir*, Seuil, 1997, p.133.]。
- (13) Taguieff, op. cit., p.37, Soudais, op. cit., pp.74-5. 1990年代に入って、政権にあった社会党への有権者、特に、青年、労働者、事務職員での信頼の低下が進む。そのような現象は、1992年地域圏議会選挙、1993年国民議会選挙で鮮明になり、1994年欧州議会選挙では、民衆層での支持は青年実業家のB・タビのリスト(「急進エネルギー」)へと向かった [Le Gall, “Européennes”, p.5.]。
- (14) Mayer, op. cit., p.444. 1988—95年の労働者票の流れを見ると、明確に、労働者の社

会党離れが確認しうる。社会党候補に対する労働者の投票率は、42%から21%へと半減している。それに対して、シラクは、7%から15%と票を伸ばしている。かつて、民衆的社会層で高い支持を獲得したのがドゴールの強さの要因であったが、1995年大統領選挙でのシラクの勝利は、変革を望む労働者を始めとした民衆票の一部を取り戻したことにその勝因があった。だが、最大の労働者における勝者はルベンであり、彼の得票は労働者層で飛躍的に伸びている [Todd, "Le Pen", p.39.]。

- (15) Perrineau, "La troisième force", *Le Nouvel Observateur*, 15-21 juin 1995, p.63.
 (16) 1994年欧州議会選挙後に、世論調査機関CSAによって実施された世論調査でも、FN投票者の極めて欧州統合に批判的な姿勢が明らかになっている。表1-7の各設問の回答を見れば、保守の中の反マーストリヒト条約派であるドヴィリエの支持者に比べても、FN支持者の欧州統合に対する不安と敵意がかなり強いことが分かる。

表1-7 1994年欧州議会選挙投票者の欧州統合に関する態度 (%)

	全体	共産党	社会党	R V	P D	R F	タビ	ドヴィリエ	ルベン
自分をヨーロッパ人とは思っていない	35	51	17	34	26	38	63		
欧州議会がこれ以上権力を持つことを望んでいない	30	41	13	28	22	45	55		
欧州統合に対して不安か敵意をもっている	47	65	24	35	36	66	82		
EUのオーストリア、スウェーデン、ノルウェー、フィンランドへの拡大に敵意をもっている	30	38	14	24	26	38	61		
EUの東欧への拡大に敵意をもっている	48	42	28	49	50	57	75		
EU拡大はフランスへの脅威	34	48	11	29	27	44	76		
共通通貨に反対	30	39	16	22	21	37	63		
アメリカ・日本製品への保護主義の強化	45	57	38	41	43	50	52		

出典：Perrineau, *Le Symptôme*, p.162.

- (17) 1995年大統領選挙でも、同じような傾向が読み取れる。投票動機のうち、ルベン選挙民において突出しているのは、移民 (53%, 全体22%), 治安 (44%, 全体27%) であり、伝統的なFN支持者の傾向は持続している。1997年と同じく、FN選挙民においても失業への関心は高く (58%, 全体57%), 社会保障給付 (バラデュール32%, シラク30%, ルベン34%, 全体35%), 社会的排除 (バラデュール28%, シラク34%, ルベン36%, 全体36%), 購買力・賃金 (バラデュール23%, シラク28%, ルベン39%, 全体32%) といった争点での保守支持層に比べてのルベン支持層での関心の高さと合わせて、FNが民衆的社会層で支持を調達していることをうかがわせる。また、政治腐敗に対する関心の高さ (43%, 全体34%), 欧州統合に対する関心の低さ (8%, 全体14%) も、1997年国民議会選挙でのFN選挙民との共通性を示している [J. Chiche et N. Mayer, "Les enjeux de l'élection" in D. Boy et N. Mayer, *L'Électeur à ses raisons*, Presses des

Sciences Po, 1997, p.228.]。

- (18) エスノセントリズム（自民族中心主義）に関しては、極右と左翼・保守の支持者間に対立軸が存在し、FNは今日、エスノセントリズムの中心的なイデオロギー的担い手である [Perrineau et Ysmal, op. cit., p.277.]。

第3節 1990年代の政党システムと国民戦線

1990年代の前半のフランス政治は、左翼の不振、保守への政権交代によって特徴づけられる。1993年国民議会選挙では保守側が大勝し、左翼は壊滅的打撃を受ける。1995年大統領選挙では保守候補シラクが当選し、大統領も国民議会も保守側の手に落ちた。しかし、保守への政権交代も、フランスの経済・社会的困難を解決することができず、国民は保守への失望を味わう。そのような政権交代は、左右両翼の政策的相違を希薄にし、有権者の既成政党に対する信頼感は大きく揺らぐ。既成政党の衰退と新興政党の台頭という現象は、90年代にさらに進行する。

例えば、1995年大統領選挙第1回投票の結果を見てみると、共産党も含めて、37%の有権者が周辺の勢力に投票しているが、それは、1988年大統領選挙時の28%に比べて大幅に増大している。結局、約48%の有権者しか左右の既成政党には投票していない。約23%の棄権および白・無効票も加味した時、既成政党への批判的な投票行動が浮かびあがってくる。有権者は選挙をますます抗議の機会として活用している⁽¹⁾。

そのような既成政党への逆風を最も有効に利用して勢力を伸ばしたのが、FNであった。そして、FNの躍進によって最も影響を受け、脅かされているのが保守勢力であった。

FNは、フランスの政治システムの本質的要素になり、今や、社会党、RPRに次ぐ第3党になった。右翼陣営でのFN票の比重は近年ますます増大し、保守勢力の将来に大きな影響を与える可能性を高めている。国民議会選挙を例にとれば、極右票の割合は93年国民議会選挙では20%台に乗り、97年には30%台に達している（表1-8）。

1998年地域圏議会選挙の結果を見ても、右翼陣営でのFN票の割合は45%を占めている。フランスの選挙では、現在でも、左翼-右翼の2極対立の構

表 1-8 第5共和制における右翼陣営内での極右票の割合
(フランス本土) (%)

国 民 議 会 選 挙										
1958	1962	1967	1968	1973	1978	1981	1986	1988	1993	1997
4.6	1.3	1	0.1	1	1.6	0.7	18.4	18.4	22.6	30.1
大 統 領 選 挙										
1965			1974			1988		1995		
7.8%			1.4%			28.7%		25.8%		

出典：P. Perrineau, *Le Symptôme Le Pen. Radiographie des électeurs du Front national*, Fayard, 1997, p.95.

図が支配しており、右翼陣営の中で極右票の占める比重がこれだけ高まってくると、特に、2回投票制で実施される選挙では、保守陣営にとって第1回投票でのFN票の行方は大きな意味をもってくる。

そうなると、FNは保守勢力に対する次の戦略段階に進む必要があった。すなわち、FNと協力する勢力を分裂させるか、その一部を吸収するために、保守勢力を揺さぶり、弱体化させる戦略である。そのためには、自分と左翼の間に保守をサンドイッチし、FNと協力して中道支持者を失うか、FNとの協力を拒否して2正面で戦い、結果として左翼に敗北することを甘受するかを選択に保守勢力を追い詰めることが必要であった。

そのようなFNの保守勢力への圧力は、1990年代前半には、左翼勢力の弱体化によって一時的に緩和される。だが、権力に復帰した保守政権への信頼低下は左翼の復活をもたらし、FNの戦略は再び有効性を発揮する⁽²⁾。そして、もし、FNへの態度をめぐって保守が分裂した場合、数的にも政治的にも弱体化した保守勢力に対して、FNは自分たちに有利な協力条件を押しつける、というのがFNの望むシナリオである。

保守に対する揺さぶりの条件は、既に、1993年国民議会選挙で整いつつあった。同選挙では、FNが第1回投票で12.5%以上を得票した選挙区が、前回(1988年)の約30から100以上に増えた。FN候補が第2回投票に進出する条件である12.5%を突破する選挙区が急増したことは、左翼候補とFN候補とのみつどもえ選挙の可能性が高まるだけに、保守にとって脅威であっ

た⁽³⁾。

1995年大統領選挙第1回投票では、シラクは20.5%の得票で、23.2%の社会党候補ジョスパンにトップの座を譲った。シラク票は、同じRPR所属のバラデュールの18.5%を足しても約39%で、第2回投票で過半数を獲得するには大幅に足りなかった。シラクにとって、ジョスパンに勝つためには、15%のルペン票は貴重な価値をもっていた。ルペン自身は白票を投じると明言し、支持者には自主投票を呼びかけた。第1回投票でのルペン票の少なからぬ部分はジョスパンに回ったが、シラクはかろうじて当選した。

1997年国民議会選挙第1回投票での14.9%の得票によって、FNは保守陣営との交渉力を手に入れた。ルペンは、第1回投票後、マーストリヒト条約や「国民優先の原則」に対する立場を明らかにしてFNの立場を承認する保守候補に支持を与えることを表明した。その結果、9人の保守候補がその条件を認め、FNの支持を取りつけた。また、ルペンは、ストラスブール市長(社会党)のC・トロートマン(Catherine Trautmann)、RPRのA・ジュペ(Alain Juppé)など落選させるべき候補のリストも同時に発表している⁽⁴⁾。

今回は、第2回投票に進出可能な132候補の内、コート＝ドール県第3区でCNI(自営全国センター)候補のために候補を降ろしている。その代わりに、CNI側は、ローヌ県の13区と14区でFN候補を支持している。他にも、メーヌ＝エ＝ロアール県で、「民主主義の力」に属する候補のCh・マルタン(Christian Martin)にFNの支持が与えられた。彼は、FNの「国民優先の原則」を受け入れ51.3%の得票で当選を果たしている⁽⁵⁾。

結局、FNは、1997年国民議会選挙の第2回投票で、 $\frac{1}{4}$ に近い選挙区(131選挙区)で候補を進めた。それは、保守側の敗北と左翼の政権復帰に対して決定的役割を果たした。FNは、1988年国民議会選挙では約30選挙区、1993年国民議会選挙では100以上の選挙区で第2回投票に候補を立てているから、90年代に入って決選投票の恒常的要素になりつつあることが分かる。

特に、保守にとっての脅威は、第2回投票で、FNと左翼の3候補が残るケースであった。そのようなケースは、1988年国民議会選挙では8選挙区、1993年国民議会選挙では14選挙区に過ぎなかったが、1997年国民議会選挙では76選挙区と急増している。そのうち、69選挙区は保守系が議席を握ってい

たが、40選挙区で左翼に議席を奪われている⁽⁶⁾。その40選挙区では、32選挙区で左翼候補は45%以下の得票で保守候補を破っており、それらの左翼候補は、FN候補の存在なしでは大部分が当選することはできなかった⁽⁷⁾。1997年国民議会選挙で、左翼が30議席差で与党になっていることを考えれば、FNの第2回投票での候補擁立方針が、政権の帰趨にとって重要な意味を持っていることは明らかである。

そして、FN支持者が、保守候補の当選にとって阻害的要因になっていることは、第2回投票で、保守候補に流れるFN票が減っており、逆に、左翼候補に向かう票が増えていることから理解できる。1993年国民議会選挙では、社会党と保守の候補者に対して、第1回でFNに投票した有権者は、第2回では、社会党候補9%、保守候補62%、棄権もしくは白・無効票29%と分かれており、圧倒的部分が保守に向かっていた。ところが、1997年国民議会選挙では、それが社会党候補21%、保守候補50%、棄権もしくは白・無効票29%となっている⁽⁸⁾。

別のデータも紹介すれば、1995年大統領選挙でシラクが55%以上得票している選挙区で、97年国民議会選挙では21名の左翼候補が当選している。そのうち、少なくとも7選挙区はFNとの競合の犠牲になって保守候補が落選し、左翼候補が40%以下の得票で当選している⁽⁹⁾。

また、第2回投票で最も数的に多い(383選挙区)社会党・緑の党候補と保守候補の対決パターンにおいては、左翼候補51.3%、保守候補48.7%と、保守が敗北している。その要因の1つが、第1回投票でのFN投票者の動向であった。すなわち、社会党候補は、左翼もしくは緑の党支持者の票を手堅くまとめているのに対して、保守候補は、FN支持者の票を半分もまとめていない(表1-9)。

「その他のエコロジスト」の支持者を別にすれば、第1回投票での極左、共産党、緑の党支持者は、第2回投票では社会党・緑の党候補に忠実に投票している。ところが、保守候補の場合は、保守票はほぼ固めているが、FN支持者の49%しかまとめきれていない。そして、FN支持者の25%は社会党・緑の党候補に、26%は棄権もしくは白・無効票に向かっている。まさに、左翼の政権奪取を可能にしたのは、FNであったと言っても過言ではない⁽¹⁰⁾。

表 1—9 社会党・緑の党と保守の対決選挙区における第2回投票での票の移転 (%)

	棄権 白無効票	社会党 緑の党	保守
棄権、白・無効票	82	7	11
共産党	5	94	1
極左	16	74	10
社会党・その他の左翼	1	97	2
緑の党	5	92	3
その他のエコロジスト	17	20	63
保守	3	2	95
FN	26	25	49
その他	23	47	30

出典：P. Perrineau et C. Ysmal. *Le vote surprise. Les élections législatives des 25 mai et 1^{er} juin 1997*, Presses des Sciences Po, 1998, p.290.

1997年国民議会選挙で、FNは、その歴史で初めて、フランスの政権の移動に直接関わり、保守から左翼へと与党を変えた。今や、FNは、単独で政権を握ることはないとしても、保守の勝利を阻む勢力にはなっている。

そして、そのようなFNの圧力は、1998年地域圏議会選挙後の議長選挙の際にも現実のものとなっている。ラングドック＝ルシヨン、ローヌ＝アルプ、ブルゴーニュ、ピカルディ、オート＝ノルマンディの5つの地域圏議会で、FN議員の暗黙の、もしくは明示的な協力によって保守系議長が誕生した。極右との協力が支持者の不興をかうことを覚悟で、地域圏議会で多数派を形成するために、そのような地域圏の保守陣営は苦渋の選択をくだしたのだった⁽¹¹⁾。

FNはそのような有利な環境を背景に、攻勢を強めている。彼らは、保守の政権復帰はFN抜きではありえないことを訴え、保守側が、FNの「悪魔視 (diabolisation)」や左翼との反FN統一戦線である「共和主義戦線」の方針を採用しないことを求めている。1997年国民議会選挙の直後、FNの全国代表幹事B・メグレは、「FNが既に築きあげたものを土台につくられる新しい結集」を訴え、保守の選挙での敗北が広範な政治的再編を可能にするという見通しを述べている⁽¹²⁾。

そのような事態に対して、保守の中からFNに対して取るべき態度をめぐって様々な反応が表面化する。その問題は、1984年に突然国政選挙の場でFNが躍進して以来、保守陣営につきまとうてきたものであった。

1983年、FN躍進のきっかけをつくったのは、地方都市ドルーでのFNと保守との選挙協力であった。FNの力が未知数の頃は、保守は左翼に対抗するために、気軽にFNを利用することができた。1986年の地域圏議会選挙でもアキテーヌ、フランシュ＝コンテ、オート＝ノルマンディ、ピカルディ、ラングドック＝ルシヨンの5つの地域圏議会で保守が議長を獲得するために、FNとの協力に踏みきった。RPRのシラクは、ドルーでのFNとの協力を擁護し、86年の地域圏議会での議長選挙時の協力にも異議を唱えなかった⁽¹³⁾。だが、それ以降は、地方レベルを例外として、国政レベルではFNとの協力の可能性は否定されてきた。90年代にも、そのような方針は継続され、FNの封じ込め、孤立化の戦略が進められた⁽¹⁴⁾。

1998年に予定されている地域圏議会・県議会選挙も睨んで、FNとの協力を求める声が保守政治家の間から上がってきた。UDF前代議員A・グリオットレー（Alain Griotteray）は「15%で、FNはもはや極右政党ではなくなった」と、FNを協力の対象とすることを示唆した。パスクワも、RPRがFNとの間で合意に向けて交渉することを望んでいた⁽¹⁵⁾。

RPR党首のセガンは、1997年9月5日に、「FNの悪魔視だけで満足することは、私にはそんなに得策であるとは思えない」と発言し、その2ヵ月前にも「(効力がなく無駄な)FNの支持者の悪魔視でもなく、(恥ずべき)FN指導者との協力でもない」新方針を提唱している⁽¹⁶⁾。

UDFのA・ペルフィット（Alain Peyrefitte）は、「右翼陣営内部の政治的亀裂を修復する」ことを保守勢力の優先課題と主張し、社会党と共産党との接近を例に、FNとの協力を示唆した。また、R・パンドロー（Robert Pandraud）は、FNの頂上より下部との対話に好意的で、UDFの幹事長のC・ゴアスゲン（Claude Goasguen）も、「冷静で建設的な熟慮が、FNの悪魔視の袋小路にとって代わる時が来た」と訴えた⁽¹⁷⁾。

1998年6月14日には、前首相バラデュールが、社会保障給付の問題についてのフランス国民と外国人との間の権利に関する委員会をつくり、それをF

Nにも開放することを提案した。首相経験者による、FNの「国民優先」の主張に擦り寄るような発言には、即座に、RPR党首のセガンや内務大臣P・シュヴェヌマン（Pierre Chevènement）が批判を加えている。しかし、RPR, UDF内では、バラデュール発言への批判と同時に、国民優先の原則を擁護する発言や、それについて議論する必要性を認める発言も相次いでいる⁽¹⁸⁾。

保守側では、FNとの協力をめぐる意見が対立し、現在でも明確な態度を選択できていない。そのような保守の態度の曖昧さは、1997年国民議会選挙第2回投票に臨む方針にもよく表れていた。保守は、極右候補の当選を阻止するための左翼―保守の統一戦線である共和主義戦線の方針を退けた。彼らは、極右との協力を拒否するが、かと言って、極右候補が当選する可能性がある場合でも、左翼との間の候補者調整には応じず、極右の邪魔をしないという態度をとった。保守指導者たちは、第1回投票後、極右以外の候補への投票を指示することもなく、何人かの保守候補は、慎重にはあるが、FNの支持を求めさえした⁽¹⁹⁾。

1990年代、FNは選挙で15%の得票を獲得する勢力へと成長し、既成政党、特に、保守勢力への大きな脅威となっている。そして、保守勢力は、FNへの対応をめぐって揺れている。FNの存在は、2002年大統領選挙で保守の大統領が更新されるのか、同年の国民議会選挙で左翼政府が更新されるのか、その帰趨を決める重要な要素の1つである。

(1) C. Fieschi, “The Other Candidates: Voynet, Le Pen, de Villiers and Cheminade” in J. Gaffney and L. Milne, *French Presidentialism and the Election of 1995*, Ashgate, 1997, p.137. そのようなフランス国民の政治意識の変化と政党システムの変容について、各種世論調査のデーターなどを紹介しながら分析している論文として、岩本 典「現代フランス人の政治意識の変化とその基底にあるもの」『大阪産業大学論集 社会科学編』109号（1998年6月）参照。

(2) Bihl, op. cit., pp.211-2.

(3) P. Fysh, “Candidates and Parties of the Right” in R. Elgie(ed.), *Electing the French President. The 1995 Presidential Election*, Macmillan Press, 1996, p.79.

(4) M. Darmon et R. Rosso, *L’après Le Pen. Enquête dans les coulisses du FN*, Seuil, 1988, pp.139-40.

- (5) Ibid., p.247.
- (6) Ibid., p.247.
- (7) Bihr, op. cit., p.212.
- (8) Perrineau, *Le Symptôme*, p.96. 1997年国民議会選挙第2回投票での、左翼と保守候補が対決した130選挙区についての世論調査機関 IPSOS の調査（回答者2395名）でも、第1回投票でFNに投票した者は、第2回投票では保守候補50%、左翼候補30%、棄権20%という投票行動を示している [Mayer, op. cit., p.441.]。
- (9) R. Ponceyri, “L'étrange défaite de la droite”, *Revue politique et parlementaire*, no. 989, juillet-août 1997, p.33.
- (10) Ibid., p.42.
- (11) そのような協力は、各地域圏議会の保守内部に大きな亀裂を生み出した。ローヌ＝アルプでは、保守と左翼が60議席ずつで拮抗し、FN (35議席)の協力でCh・ミヨン(Charles Millon)は議長に就任した。しかし、FNとの協力で不服な15名の保守議員はミヨンの辞任を要求している。ピカルディ、ラングドック＝ルシヨンでも、FNとの協力をめぐり紛糾し、結局、ミヨンとピカルディのCh・ボール (Charles Baur), ラングドック＝ルシヨンのJ・プラン (Jacques Blanc) がUDFから除名されている。結局、オート＝ノルマンディではFNとの協力で誕生した議長は辞任したが、4つの地域圏では議長にとどまった [Libération, 9 avril 1998.]。
- (12) Bihr, op. cit., p.213.
- (13) P. Fysh and J. Wolfreys, “Le Pen, the National Front and the Extreme Right in France”, *Parliamentary Affairs*, no.45, July 1992, pp.313-4.
- (14) ただし、1990年代に入っても、地方レベルでFNと協力する「逸脱」は続いていたし、国政レベルでの政治家でも、J・メドゥサン (Jacques Médecin) のように「ルペンと99%一致する」と公言したり、M・ポニアトフスキー (Michel Poniatowski) のように「左翼はFNの10倍悪しきものである」として、FNへの共感を鮮明にする政治家が存在していた [J. Marcus, *The National Front and French Politics*, New York University Press, 1995, p.146.]。
- (15) M. Rajsfus, *En gros et en détail. Le Pen au quotidien 1987-1997*, Éditions Paris Méditerranée, 1998, p.103.
- (16) Darmon et Rosso, op. cit., p.248.
- (17) Perrineau, *Le Symptôme*, pp.99-100.
- (18) *Le Monde*, sélection hebdomadaire, samedi 27 juin 1998.
- (19) *Le Monde*, dimanche 1^{er}-lundi 2 juin 1997.